西照

西照寺寺報「さいしょう」
第２４号
2009年8月17日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
西照寺HP http://nisitera.eek.jp

祠堂永代経　勤修

左記のとおり今年度の祠堂永代経をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

八月二十六日(水)　午後一時半～
二十七日(木)　午後一時半～

布教使　小島　信　師（射水市堀岡　聞光寺）

西谷山　西　照　寺

合掌子ども会　児童募集

子どもたちに仏さまの心が届くように……。
合掌子ども会は、おつとめとゲームが中心のお寺でひらかれている子ども会です。

対象　小学生

毎月一回。学校が休みの日。一時間半程度開きます。申込みいただければその都度開催日をご案内します。
会費は無料ですが、初回のみ聖典などの費用五百円が必要です。　（西照寺　℡84-0705）

正信偈のはなし　第一話

第八世の蓮如上人（1415～1499）が日常の勤行に制定されて以来、浄土真宗の門信徒にとりまして、最もなじみ深いおつとめが正信偈です。詳しくは、「正信念仏偈」といいます。「念仏の教えを正しく信じるための道理を説いた詩」という意味でしょうか。親鸞聖人の代表的な著述である「教行信証」六巻の中の行の巻の末尾に書かれている文章です。漢詩（韻文）の体裁で、漢字七文字を一句として百二十句あり、二句一行で六十行からなっています。

浄土真宗の教えの肝要なあらましが述べられていると言えるでしょう。

先ず、親鸞聖人は、この正信偈をお作りになった気持ちを

『しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閲して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りていはく』と述べられています。

「大聖の真言に帰し」とあるのは、釈尊の真実の言葉に帰依するということです。それを親鸞聖人は、阿弥陀如来がすべての人を救いたいと願われた「本願念仏」をお説きになる『大無量寿経』に見い出されました。次の「大祖の解釈に謁して」というのは、三国（インド・中国・日本）の歴史を通じて、『大無量寿経』の正しい解釈を伝えてくださった七人の高僧方の御教示に従ってということです。

そして、私を間違いなく救い導いてくださる阿弥陀仏の恩徳が、まことに深いことを自ら信じるとともに、他の人に念仏をすすめ、信じていただくためにこの詩を作ったと述べられるわけです。

続いて、正信偈本文が書かれていきます。

次にこの本文についてみると、

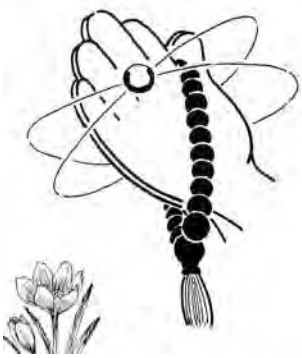
最初の一行二句である「帰命無量寿如来　南無不可思議光」は、南無阿弥陀仏の意味を明らかにして、親鸞聖人自身が阿弥陀如来に帰命することを示しています。しかも、それは正信偈全体を集約して表しています。ですから、この一行二句が正信偈の中心であり、以下の文章は、その展開・解説と位置付けられます。

また、その展開・解説である二行目以下の文章は、二つに分けられています。

一つは、「法蔵菩薩因位時」から「難中之難無過斯」までの二十一行四十二句です。依経段といわれ、『大無量寿経』に依って、その教えの要が讃歎されています。先ほどの「大聖の真言に帰して」の部分に当たります。いま一つは、「印度西天之論家」から最後の「唯可信斯高僧説」までです。依釈段といわれますが、「大祖の解釈に謁して」の部分に当たり、七人の高僧（七高僧）の一人ひとりの教え（解釈）とそのお徳

が述べられています。

そうして、阿弥陀如来の本願念仏の教えは、親鸞が勝手に作った教えではなくて、釈尊のお説きになった真実が、面々と七人の高僧方に受け伝えられて私のところまで届けてくださったのである。どうか悩める多くの人たちよ、この高僧の教えと促しに従って、念仏申す人生をおくってくださいと結ばれるのであります。



帰命無量寿如来（無量寿如来に帰命し）

南無不可思議光（不可思議光に南無したてまつる）

帰敬序といわれるところです。阿弥陀如来を敬い、帰依していくという親鸞聖人のお心が述べられています。

「帰命」というと言葉と「南無」とは、同じ意味です。ご承知のように、仏教はインドに起こりましたので、お経はサンスクリット語（梵語）で書かれています。それが中国に伝えられて、漢字に翻訳されるのですが、その時に原語の「namasu ナマス、namo ナモ」という言葉を、意味を取って「帰命」と訳したり、ある時は、「音写」というのですが、発音を漢字に写して、「南無」とあらわしました。ともに「敬い信じ順う、拠り処とする」という意味でしょう。親鸞聖人は、阿弥陀如来の帰って来いという命令に、順っていくことだと解釈されているように思います。

さて、昭和三十一年のことです。日本は戦後復興も進み、世界の仲間入りを果たさねばという意識もあったのでしょうか。南極観測に乗り出すことになりました。第一次南極観測隊は、その年の十一月に観測船「宗谷」を仕立てて日本を出発し、翌年一月下旬に南極オングル島に上陸して昭和基地を建設します。そして、第一次越冬隊員十一名を残し、日本に引き揚げてきました。その際、氷の海に閉じ込めらた「宗谷」は、外国船に助けられて、ようやく日本に帰ってきます。翌昭和三十二年暮れ、第二次越冬隊員を乗せて、再度日本を出発します。ところが今度は、厳しい悪天候の中、氷に阻まれ接岸することもできません。やむなくその年の越冬は断念することになりました。かといって、第一次越冬隊をそのままにしておくことはできません。天候の合間を縫い小型飛行機を使って、かろうじて隊員は収容できましたが、十五頭のソリ犬は涙をのんで基地に置き去りにすることになりました。（裏面に続く）

（中面からの続き）

日本では、そのことが新聞紙上などで批判されましたが、どうすることもできなかったのでしょう。翌昭和三十三年の第三次南極観測隊が、生存していた「タロとシロ」の二頭のソリ犬を発見します。その感動的な経緯は、何回か映画にもなっていることです。

その第一次越冬隊員の話です。

当時は、今日のようにインターネットや衛星電話もない時代です。電報だけがたった一つの通信手段だったようです。いわゆるモールス信号で、送られてくるのはカタカナと数字のみです。殆どは公的な仕事上の電報で、私的には、家族からの年賀電報ぐらいなものです。厳寒の地で過酷な任務を強いられる隊員たちにとっては、それが大きな楽しみでした。

昭和三十三年の新年、日本を出発して四百日余り、食料も底を尽きかけ、国内では安否が心配される隊員のもとに、待望の家族からの電報が届きました。

家族の近況を知らせるもの、隊員の健康や無事の帰国を願うものなど、電報を次々に披露しあいながら、冷やかしたり笑ったりと楽しい時間が過ぎていきました。やがて、当時三十六歳の大塚正夫隊員の電報を披露する番になりました。奥さんのツネ子さんからのものです。しかし、しんみりと涙ぐんでみんなに披露することができません。どうしたのか。家族に不幸でもあったのだろうか。心配した周りの隊員たちも、覗き込みますが、同じようにしみじみとした気持ちになってしまいました。

その電報には、たった三文字「アナタ」と書いてあるだけでした。

日本の奥さんにとっては、伝えたいことは山ほどあったに違いありません。けれども字数に制限があるなか、三文字の「アナタ」という言葉にすべてをこめて、届けられたわけです。

それを届けられた大塚さんは、その三文字に込められた、奥さんや家族の願いを感じ取り、感動されたんだと思います。家族の願いに支えられている自分を実感し、がんばろうという力と勇気が湧いてきたのではないでしょうか。

阿弥陀如来は、真実の命の世界から、その願いの全体を南無阿弥陀仏という六文字に込めて、迷える私に届けて下さっています。その願いに気づかされるところに私の帰命という生活がはじまります。

（文責　住職）